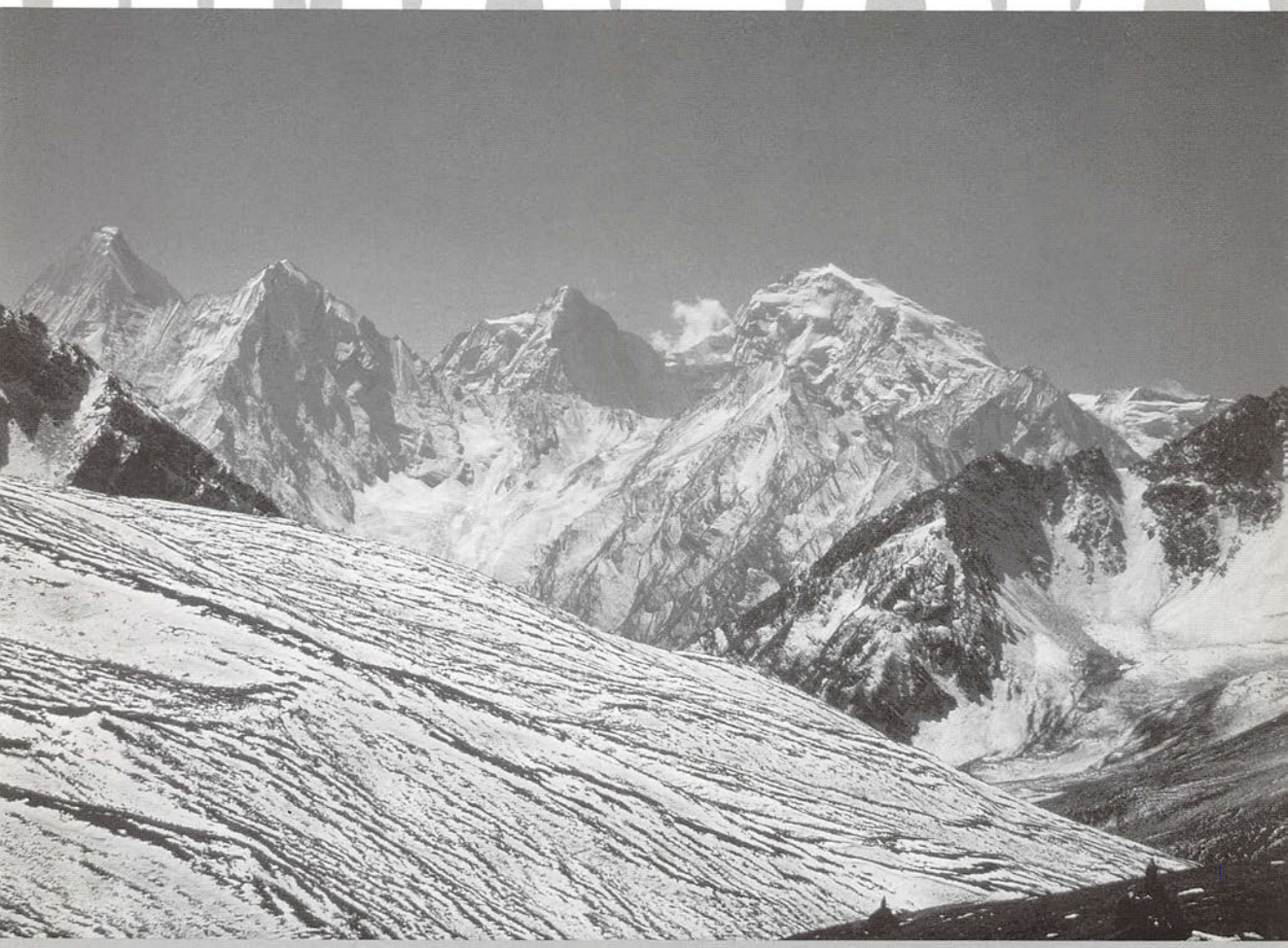
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成14年4月1日発行（毎月一回1日発行）

ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.365



2002 APRIL

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

2003年ＨＡＪ登山隊隊員募集

八千メートル峰　シシャパンマに新ルートを求めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部（横浜）、95年マカルー東稜下部（ＪＡＣ）、97年Ｋ２西壁上部（ＪＡＣ東海）など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・オユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027ｍとした場合、中央峰の標高が8,008ｍとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央峰に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年ＨＡＪ隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちもそこが「8,000ｍ」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。今後中央峰の標高が8,000ｍを切ることも考えられる。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的に困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えている。意欲ある岳人の参加を期待する。

記

1．時期　2003年９月10日～11月８日（60日間）
2．募集人員　10名程度
3．負担金　100万円
4．申し込み、問い合わせ　ＨＡＪ事務局

表紙写真

私達はアピ登山を終え、ティンカール・パス（ティンカール・リプ・ラグナ）への旅へと出掛けた。ここ極西ネパールは私達にとって、憧れの「辺境の地」であるが、地域住民にとっては昔ながらの巡礼路であり交易路である。ティンカール・コーラ源頭からは屏風の様なアピ（写真右手）、ナンパ（左手）の山群が望めた。　（文と写真：野沢井　歩）

ヒマラヤ No.365

1．国際山岳年日本委員会趣意書
2．未踏の念青唐古拉山脈東部を探る(1)　中村　保
13．パキスタン2002年登山事情
17．ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・Books・トピックス〉
18．ティンカール・パスの旅　野沢井　歩
22．カンチェンジュンガ入山者
24．寸感・事務局日誌

国際山岳年日本委員会趣意書

国連は1992年、リオデジャネイロで開かれた地球サミットで、21世紀の地球環境の保全を目指す「アジェンダ21」を採択した。「アジェンダ21」の第13章は、山岳地域の環境保護を目指すもので、それを具体化するために98年秋の国連総会でリオの会議から10年後にあたる2002年が、「国際山岳年」として選ばれた。

世界各国でこれに呼応して国内委員会が設置されることとなった。日本でも、日本やアジアの山岳環境の保全を目指す運動をはじめようと、山の自然や山村の人々と関わってきた研究者、登山者の有志が集まり、何度も準備会合を開いた末、11月はじめ、「国際山岳年日本委員会」を発足させた。日本委員会の発足は、外務省を通じて国連の国際山岳年主管組織であるローマのＦＡＯ（世界食糧機関）に、日本を代表する唯一の組織として公式に連絡され、国際的に登録された。（日本委員会の構成は、下記の通り）

日本は山国と言いながら、戦後の数十年、開発優先の風潮の中で、山々のことはおざなりにしてきた。山々は、私たちの暮らしにとって最も大切な「水」をもたらす。この機会に、身近な山々を見なおし、山山を愛する市民の輪を広げることは、私たち自身のためであるだけでなく、次世代の暮らしの環境を守るために不可欠のことと考える。「国際山岳年」を通して、身近な里山からヒマラヤを含めた「山の明日」を考え、さまざまな形の行動を通じて、山々を愛する活動が広がってゆくことを願う。

2002年１月　国際山岳年日本委員会

●委員長

田部井淳子（日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト〔ＨＡＴ－Ｊ〕代表、環境省中央環境審議会委員、文部科学省保健体育審議会委員）

●特別顧問（あいうえお順）

愛知和男（元環境庁長官、日本エコツーリズム推進協議会会長）

梅棹忠夫（国立民族学博物館顧問、財団法人千里文化財団会長、京都大学名誉教授）

吉野正敏（筑波大学名誉教授、国連大学上級顧問、元日本地理学会会長）

●委員（あいうえお順）

大塚博美（日本山岳会会長）

小野有五（北海道大学教授）

神崎忠男（ＨＡＴ-Ｊ、理事長）

酒井秀夫（森林利用学会理事、東京大学教授）

田中文男（日本山岳協会会長）

西本武志（日本勤労者山岳連盟理事長）

森本尚武（信州大学学長）

山森欣一（日本ヒマラヤ協会理事長）

●事務局長　江本　嘉伸（ジャーナリスト）

〒160-0007　東京都新宿区荒木町３-23-303

Tel 03-3357-7704　Fax 03-3359-7907

メイル：iym-info@zah.att.ne.jp

●事務局次長・会計担当　渡辺悌二（北海道大助教授）

●事務局　〒150-0041 東京都渋谷区神南１-１-１ 岸記念体育館内　日本山岳協会

Tel 03-3481-2396　Fax 03-3481-2395

●日本委員会支援国際・学術関係窓口

Tel060-0810　札幌市北区北10条西５丁目

北海道大学大学院地球環境科学研究科地球生態学講座気付　Fax（専用）011-706-4866

iym-info@zah.att.ne.jp（渡辺悌二・澤柿教伸）

日本委員会の主な主催行事

１月31日　国連大学での「国際フォーラム、シンポジウムへの参加」（終了）

４月７日　国際山岳年記念フォーラム「私たちはなぜ山にひかれるのか－今こそ知りたい日本の山」東京・青山「東京ウィメンズ・プラザ」

４月14日　国際山岳年記念講演会「世界の山々の自然と環境」（日本地理学会、日大と共催）東京・日本大学

７月６日～７日　富士山フォーラム　富士宮市内

７月13日～15日　国際山岳年・エコーツーリズム年記念「山岳エコツーリズム」フェスティバルin北海道2002

９月14日～16日　「国際山岳年」全国行動

10月　「山」をテーマとする民族映像フェスティバル（民族映像研究所と共催）

11月　関西地区記念フォーラム

12月　「国際山岳年」総括シンポジウム

チベットのアルプスへ

ニェンチェンタングラ
ー未踏の念青唐古拉山脈東部を探る(1)ー

2001年10－11月

中村　保

「中村さん、I am incredibly impressed. 探検的登山を志向する世界のクライマーの注意を再び惹きつけることを期待します」E-メールで送った写真にたいするアメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長クリスチャン・ベックウイズのコメントである。いささか自画自賛になるが、今回22回目の中国南西辺境行では、好天と幸運に恵まれ、私のテーマの原点―知られざる山々の探査と探検史紀行―を体現することができた会心の旅だった。行程は二つに分けた。前半は景勝地、八松措（パソンツォ）（湖）の北側の山塊に入り、後半は南側から昔の交易路を行き、分水嶺の峠を越えて嘉黎（チャリ）に出て、1924年のフランシス・キングドン・ウォードの足跡を辿った。以下山脈の概説とチベット情報、および紀行の二部に分けて筆をすすめる。

Ⅰ．山系の概要とチベット情報

『深い浸食の国』（山と渓谷社、2000年）の冒頭で私は70年前のジョセフ・ロックの言葉を引用した。「“今日では、地図の上ではもはや何も秘密は存在しない”と、こんな言葉を鸚鵡のように繰り返している不勉強な者たちがいる。しかし、だれがチベット全域、あるいは遥か僻遠の地、中国西部・チベット辺境に精通しているだろうか。」

時代は大きく変わったが、21世紀に入っても殆ど探査がされていない山域がある。なかでもここに紹介する念青唐古拉（ニンチェンタングラ）山脈東部は登山の観点からみると中国に残された最大のフィールドである。現在では急速に国家重点政策の西部大開発の波が奥地にもおよんいるので、非開放地域への許可の問題さえクリアーできれば、物理的なアクセスは容易になりつつある。が、この許可にかかわる状況はかなり微妙なので、最新のニュースを公開しご参考に供したい。

■念青唐古拉山とは

晴れた日に四川省の成都からチベットのラサへ飛んだ人は、眼下に次々と現れる念青唐古拉山東部の氷河と白雪の秀峰・鋭峰に目を見張り圧倒されたことだろう。私も何度か見ているが、機上からでは未だに山の特定は出来ていないが壮観である。中国的に表現すれば「多くの氷河は、あたかも無数の巨大な白龍が高山深谷を泳ぎまわるようで、原生林、氷河、鋭峰のコントラストは感動的な一幅の絵画である。」となろう。

念青唐古拉山脈は、北緯30－31度にかけて西端はチベットの聖湖、納木措（ナムツォ）の南側の穹姆崗日（チョム・カンリ）（7048m）に始まり、東はヤルン・ツァンポー大屈曲部の東の然烏（ラウー）まで弧を描いて連なる長大な山脈である。全長750km。山系としては、中間より若干西寄りの嘉黎を境にして二つに区分される。

1．西部は東部に比べ山域全体の標高が高く青蔵高原を形成している。青蔵公路沿いの当雄（ダムシュン）と羊八井（ヤンバジン）の間では背梁は6500mを超え、7000m以上の高峰四座が西端に集中する。最高峰は念青唐古拉山（7162m）である。比較的大きな氷河は山頂付近に集まっている。最高峰は1986年に東北大隊により初登頂されていることはつとに知られている。最高峰から青蔵公路を越えて阿扎措（アツァツォ）（湖）のほとりの嘉黎（嘉黎県の現在の県政府がある新しい町）付近までの間は5000mを超えるが特徴のない山なみであり、際立った雪峰はい。

2．東部では地勢は複雑になり嘉黎から東へ向かって次第に高度を下げる。青蔵高原の東南の周縁部で、ヤルン・ツァンポーの支流が縫目のように食いこみ峡谷をつくり、湿潤な気候は降雪をもたらし氷河を育て、秀麗な雪峰を造形し、美しい針葉樹林を涵養している。景観は一変する。

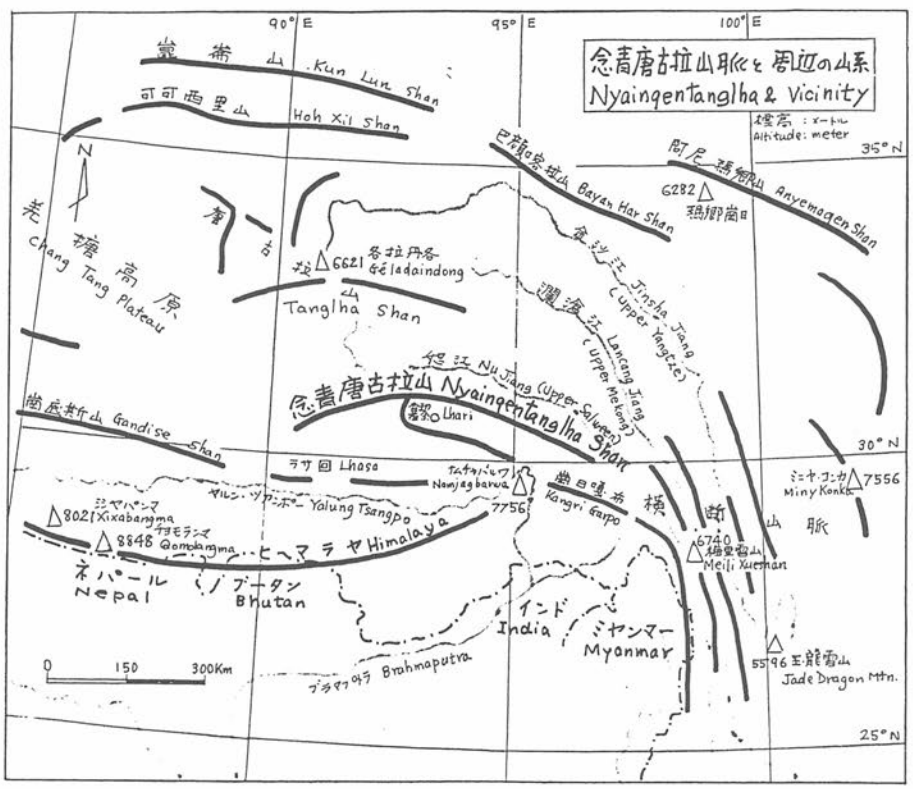
東部の主脈は最高峰の色浦崗日（セプカンリ）6956mの山塊から東へ延びる。水系的には北側の怒江（サル

ウィン川上流）と南側のヤルン・ツァンポーの二つの支流、易貢蔵布（イゴンツァンポー）と帕隆蔵布（パツンツェンポー）との分水嶺を形成する。数え切れないほどの6000m峰が存在する。殆どが未踏で大半は山の姿すら知られていない。通麦（トンマイ）に近い易貢蔵布の易貢措（イゴンツォ）（湖）の北側は全長35kmの恰青（チアチン）氷河を筆頭に大きな氷河が発達している。色浦崗日はボニントンとクラークの英国隊が1996,7,8年の3回に亘る挑戦で頂上近くまで達しているが未登のままの残されている。その他はまったく空白の状態である。

3．主脈の南、嘉黎の阿扎措付近から通麦まで、易貢蔵布の南側に連なる山群も一括して青唐古拉山東部に含める。今回の踏査の対象である。美しい湖、八松措をとりまく山と谷はアルプスを彷彿とさせる。あえて「チベットのアルプス」と呼びたいゆえんである。

ネナン（6870m）を最高峰として、天空を突く秀麗なピラミッド、ジャジャチョ（6502m）など氷雪の魅力的な峰々が綺羅星のごとく居並び、その存在感は主脈に勝るとも劣らない。1999年にジョン・ナンカビスを隊長とするニュージーランド（NZ）隊が八松措の東のピークを試登しているだけである。大部分は手付かずである。英国人はこの山塊をコンポ山群（Kongpo Mountains）と呼んでいる。工布江達（Gongpo Gyamdaゴンポ・ギャムダ）地方の山の意味である。

実際に行われた登山活動は上記の英国隊とNZ隊の二つだけであるが、この山域への取組みは10年ほど前から企画されている。1991年に長野と中国の合同パーテイーが初めて八松措へ入った。その後、長野県山岳連盟が中国西蔵登山協会と共同で綜合的な探査を行う議定書が調印されたと聞く。長野のグループは1994年に嘉黎から入って偵察を行い初めてジャジャチョ峰6447mを紹介した。（『山と渓谷』1994年8月号）2000年の秋には嘉黎から易貢蔵布沿いに通麦まで下ろうとしたが、通行不能であると現地の公安にストップをかけられラサへ引き返えし、八松措から北の谷に入ったが、天気は味方しなかったようだ。2001年9月、我々より一ヶ月前に二人の欧米人が八松措から北の谷に入ったと結巴で聞いた。この原稿を書いている12月中旬に英国アルパイン・クラブより情報があり、ゴンポ



山塊に来た二人はジョン・タウン、デレック・バックルという英国人であることが分かった。詳細を問合せ中である。

■氷河の発達状態

氷河の実地調査に関しては、1975年に中国の専門家により易貢措の北の若果(ルオクオ)氷河のみが調査されただけであるが、『中国氷河概論』(中国科学院蘭州氷河凍土研究所、科学出版社、1988)には山脈全体の氷河の概説が纏められている。手元にあるビジュアルな資料や情報は極めて少なく限られているが、旧ソ連製1:500,000地形図によって山群の全体像を俯瞰できるし、いかに氷雪と氷河が発達していか分かる。さらに1:200,000の地図で個々の山と氷河の況を知ることができる。中国人民解放軍の1:50,000、1:100,000の地図が事前に手に入らない以上、今のところソ連の地図が頼りである。

『中国氷河概論』からの要約する。

念青唐古拉山脈東部はヒマラヤ山脈の東端(ナムチャバルワ峰)の北から北東に位置し、横断山脈と合流してラッパ状の地形となっているため、ベンガル湾からの暖かい湿った気流の主要通路となっている。そのため、この山域は降水量が最も多く、最も湿潤である。氷河も最も発達している。西に向かうにしたがい降水量は徐々に減少する。地勢は高くなってゆくが、氷河は発達していない。同時に平衡線(訳者注)の高度変化も非常に顕著になってゆき、東部では海抜4500m前後だが、西に行くにしたがい高まり、羊八井の主峰では5700mにまで上がる。

(訳者注:平衡線は雪線とは少し違う。中国の学者が氷河研究のために使っている概念で、氷河の消長になにが影響しいるか、降雨量か、夏の気温かなど厳密に調査をし、それを降水による水の供給がいくら減ったとか、何がいくら蒸発したか等を計測し、そのプラス・マイナスを物質均衡(バランス)が負だとか正だとか呼んでいる。その結果として氷河が何メートル上昇した等討議するときに、これを平衡線が何メートル上がった下がったと言っている。同じ文中に雪線という言葉がでてきており、明らかに雪線と区別して使っている。が、結果としては雪線と似たものになると思うが。)

念青唐古拉山脈には2,905の氷河あり、その面積は5898㎢に達し、山域面積の約7%を占めている。これに崗日嘎布(カンリガルボ)の氷河面積1638㎢を加えると、全山区の氷河面積は7536㎢となり、12の中国氷河分布地域のなかで第四位に名を連ねる。欧州アルプスの氷河面積の1.7倍である。

東部は氷河の数、規模のすべてにおいて、海抜の高い西部を凌駕する中国海洋型氷河の重要な分布地域である。嘉黎以東の氷河の数と面積はヤルン・ツァンポーの大屈曲部に合流する二つの支流、易貢蔵布と帕隆蔵布に集中し、嘉黎から傾多の僅か200kmの範囲だけでも、全山域の氷河面積の60%を占めており、ここでは多くの大氷河が発達している。

長さが10kmを超える氷河は、山脈全体では28(崗日嘎布は含まない)あるが、そのうち27が東部に分布している。西部の氷河の数は約900、面積は1,000㎢で、羊八井以西の主峰地域、およびその両翼の山の背梁に集まっている。当雄北東の山塊、および青蔵公路以東の番雄日(ファンションリ)の氷河は数こそ多いが一つひとつは非常に小さい。

念青唐古拉山脈の氷河は峡谷型が主で、懸垂氷河を含めると、面積は山脈の氷河全体の54.5%を占める。しかし数のうえでは12.3%に過ぎない。峡谷型氷河は規模が比較的大きく、226ある峡谷型氷河の一氷河あたりの平均面積は9.3㎢である。氷河の多くが東南を向いていて、この地域の地勢と気流の方向が影響していることが明らかに見てとれる。

1. 最大の氷河は恰青氷河で長さ35.0km、面積151.5㎢、剥き出しとなった氷舌の末端は海抜3160m、岩屑に覆われた氷河の末端は海抜2530m、平衡線高度は4510mである。この氷河は、既に知られている中では、峡谷型氷河としてはチベット最大である。氷舌は亜高山ブッシュ湿原帯、山地針葉樹林帯、針葉樹・闊葉樹の混交樹林帯を貫き、前端は亜熱帯植物の植栽区(茶樹、木瓜など)近くまで迫っている。
2. 西布(シーブ)氷河は西部の主峰周辺で長さ10kmを超える唯一の峡谷型氷河で、形態は不規則。主要な氷雪の供給源は不明確である。氷河は雪崩によ

り補給されている。平衡線高度は5715m、氷舌は下に向かって海抜5072mのところまで延びている。

山脈の新造山運動は非常に強烈で、河流による浸食は極めて強く、山頂の平らな面の多くは破壊されていて、平坦な山頂に氷河を発達させる条件を備えていない。ただし懸垂氷河の数は多く、面積は僅かに10.1%であるが、数は氷河総数の二分の一以上を占めている。

主要氷河の要目については表―1をご参照頂きたい。

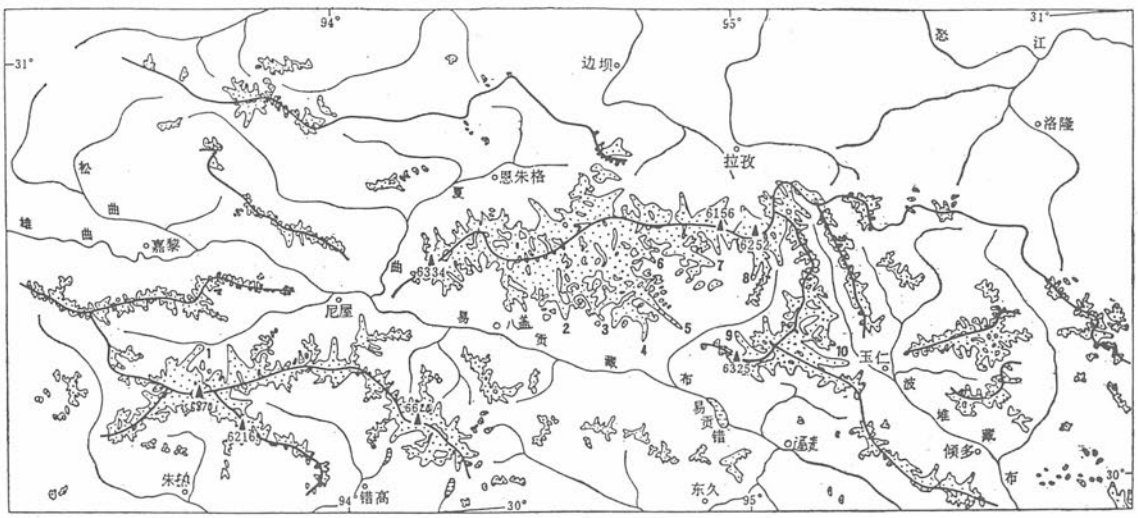
表―1　念青唐古拉山脈の主要氷河

氷河名称	氷舌末端座標 E - N	主峰高度 (m)	方向	平衡線 (m)	氷河全長 (km)	氷河面積 (km²)	氷河末端高度 (m)
東　部							
恰　青(チアチン)	94° 50 - 30° 23	6356	SE	4510	35.0	151.5	2530
江　普（ジアンプー）	94° 33 - 30° 26	6382	SE	4495	21.0	132.7	3160
則　普（ヅオプー）	95° 15 - 30° 17	6349	SEE	4683	19.2	65.8	3420
那　龍（ナロン）	94° 57 - 30° 30	6132	SE	4732	18.0	95.0	3580
夾別貢（チアビエゴン）	94° 58 - 30° 28	6349	NW	4553	15.0	46.6	3076
麻果龍（マクオロン）	95° 06 - 30° 29	6252	S	5000	14.0	58.2	4060
道　格（タオゴ）	94° 33 - 30° 25	6000	SE	4816	14.0	63.3	3950
艾嘎貢（アイガゴン）	93° 37 - 30° 23	6620	N	4929	13.0	46.0	3800
若　果（ルオクオ）	94° 45 - 30° 32	6026	SE	4715	14.0	47.2	3630
貢　普（ゴンプ）	94° 44 - 30° 21	5900	SE	4221	12.0	30.1	2700
西　部							
西　布（シーブ）	90° 36 - 30° 23	7162	E	5717	12.7	18.3	5072

■拉薩コンフィデンシャル―許可問題

主題は変わるが、チベット自治区の非開放地区への入域許可に関連し、2001年の秋に起こった少々生臭い話に移る。11月9日ラサでの宴席での会話から入る。

中　村「張江援先生、日本大学のサンルン登山隊が9月下旬出発間際になってストップさせられました。西蔵登山協会の張明興さ



念青唐古拉山脈東部・嘉黎―傾多間氷河分布図

1．艾嘎貢氷河　2．江普氷河　3．道格氷河　4．貢普氷河　5．恰青氷河
6．若果氷河　7．那龍氷河　8．麻果龍氷河　9．夾別貢氷河　10．則普氷河

んから突然テレックスで、国際的な情勢の変化（9月11日のアメリカでの同時多発テロ事件）による影響で登山隊の出発を中止してもらわねばならない、と通告があったと聞いています。私は不審に思い、友人を通じて中国側の背景を調べました。その結果、英国隊の“熱気球事件”というハプニングが引金になったことが事の真相であると分かりました。許可が取れなかったことについて、日大隊との橋渡しをしてこられた張先生にも責任があるのではないかと勘ぐりましたが、友人は張先生の責任ではないと言っています。ご意見をお聞かせ下さい。」（中村注：張江援氏は中国登山協会副秘書長で現在はラサ在住。中国西蔵自治区体育局局長補佐を勤め、西蔵登山協会にも関与している。長年に亘り日本の登山界との交流に貢献。）

張江援「日大隊の件に関しては私にも一端の責任はありますが、中村先生のご理解の通りです。お帰りになったら、熱気球事件を含め何が起こったのか、日本の皆様に説明して下さい。事実をありのままに知っていただくことで、お互いの信頼関係が深まります。」

日大のサンルン（ナムチャバルワの東に連なる7095mの未踏峰）計画が中止せざるをえなくなったとき、同じ東チベットの非開放地域への出発を三週間後の控えている私たちの計画も影響を受けるのではない懸念し、現地のエージェントに早速問いただした。折り返し「9月11日のニューヨークとワシントンで起こったテロ事件以後、中国政府はチベットの非開放地域への外国人の入域許可発行を停止した。ただし、テロ事件以前に出された許可は尊重される。中村先生の許可については問題ない。」とE-メールで返事がきた。同じ時期に東南チベットの崗日嘎布にはいったニュージーランド隊や日本のシルバー・タートル隊も9月11日以前に許可を取っていたので問題なく入域することができた。ちなみに私のグループを含め三隊ともラサの同じ旅行社が許可取得を含め遠征隊のすべての世話をしている。

では何が日大のサンルン隊に起こったのか。日大隊は一年以上前からこの計画を進めてきた。許可を取るために必要な時間は十分あった筈である。そんな疑問が頭の片隅にこびりついて離れないまま、上海経由10月17日に成都に着いた。そこで熱気球事件をエージェントから聞かされた。事件は8月中旬に起こったという。エージェントの話しはこうだ。

（1）英国隊はチョモランマ山麓のロンブックから熱気球でヒマラヤを越えカトマンズまで飛ぶ計画をたて、チベット側の許可取得を西蔵登山協会に依頼した。

（2）西蔵登山協会は人民解放軍の許可を取らずに、勝手に許可を発給した。言わば偽の許可証である。入国ビザも登山協会の招待状をもとにカトマンズでとった。

（3）この不法行為が解放軍の知るところとなり、英国チームはラサまできたが、公安にチェックされすぐ退去させられ、飛行計画は頓挫してしまった。解放軍が知らない気球が飛べば、中国空軍は領空侵犯とみて撃墜する可能性もあった。

（4）不祥事は中央政府にも通報され北京は激怒した。西蔵登山協会は政府の逆鱗にふれるところとなった。そのため、政府は西蔵登山協会にたいし、開放地区の山、例えばチョモランマ、チョー・オユー、シシャパンマへの登山許可を出す権限は従来通り付与するが、非開放地域の登山許可を出すことは禁止した。

（5）このため西蔵登山協会は日大隊にサンルンの許可を出すことできなくなった。その後、9月11日のテロ事件が起こり、以後中国政府はチベットの非開放地域への外国人の入域許可の発給を停止した。

（6）西蔵登山協会の関係者が、成都軍区にサンルンの許可取得を働きかける工作をエージェントに依頼したが、時すでに遅く不可能であった。（中村注：成都軍区は中国八大軍区の一つで西蔵軍区、四川軍区、雲南軍区、貴州軍区を統括している。）

（7）サンルン問題のすべての責任は西蔵登山協会の実務担当者にある。日大との橋渡し役となった張江援氏は、早くから実務担当者に人民解放軍の正式許可を取るよう再三督促してきたが、担当者はまだ時間があると言って手続きに着手しなかった。そうこうするうちに熱気球事件が起きてしまった。

（8）以上の話しは日本からチベットにきた登山隊には知らされていない。が、少なくとも当事者の日大隊には伝えるべきだろう。将来の友好関係維持のため、事実をオープンにした方がよい。

私の経験だが、東チベット、東南チベットの非開放地区への入域許可は相当やっかいである。チベット自治区の旅遊局や公安局などの許可に加えて、最も重要なのが人民解放軍の許可証であることはいうまでもない。発行元は「中国人民解放軍西蔵軍区司令部作戦処」である。大事な通行手形である。もっとも、通行手形を持っていても現地で公安や軍人の一存で先に進められなくなることもありうべしと、覚悟しておいたほうがよい。また、どの旅行社、あるいはエージェントを使うかも悩ましい選択であろう。人治の国、コネの世界、そして昨今の赤い資本主義、付き合い方は難しい。金が全てと言ってしまえば身も蓋もないが、外国人にとって入域困難なチベット自治区の非開放地域への個人旅行は金がかかる（欧米の若者のように無許可で入り、ヒッチハイクで移動するやり方は論外として）。チベットの旅行業者は、チベット旅行、なかんずく辺境への旅行は売手市場と見ている。高い値をつけても買う人はいくらでもいると考えている。

Ⅱ．紀行－キングドン・ウォードの足跡を辿る

2001年5－6月の失敗の記述から始める。ラサから青蔵公路を北上し、那曲の手前で公路を離れ東へ、三つの5000m前後の峠を通って禁断の土地、嘉黎に入った。計画は嘉黎から易貢蔵布沿いに下り、旧街道をキャラバンして北へ分水嶺を越えて怒江（ヌジャン）上流域に出て昌都に達するという野心的な試みだった。しかし、ようやく取れた許可の滞在日数は少なく、易貢蔵布の峡谷沿いの車道は崖崩れのため随所で寸断され、崩落、落石の危険も大きいので、すぐ引き返さざるを得なかった。いったんラサに戻った後、南側の八松措を訪れたが、悪天候でなす術がなかった。目の覚めるような美しい青いケシの花、メコノプシス・ベトニキフォリアに遭遇したのが唯一の収穫だった。

■捲土重来―変貌するチベット

6月半ばに帰国してから直ちに秋の計画を練った。前回のような轍を踏まないため、易貢蔵布を下ることは断念し、旅程を二段階に分けた。キングドン・ウォードの1924年の旅の後半とほぼ重なる。

第一段階：八松措の北および北東側の山塊偵察
ラサ－八一鎮－（八松措）－結巴（ジュバ）---[キャラバン]---錯高（ツォンゴ）---ミェツモ---ツォンバ---扎拉---（最終キャンプ地）ラマヤルン---結巴－朱熱

第二段階：朱熱から最高峰偵察後、昔の交易路を辿り嘉黎へ－旅のハイライト
朱熱－（北の谷へ）－朱熱－プンカ---[キャラバン]---ケン・ラ---嘉黎－当雄－ラサ

早目に非開放地区への入域許可を申請したので問題なく取れた。三人の熟年トリオのうち春日井さんは定年後サイクリングを始め、シルク・ロードを走っているので脚力は鍛えてあるので頼もしい。

10月16日、上海で一泊、翌日成都に入り、四川探検旅遊公司の張少宏が合流する。夜は定番の地鶏鍋とマッサージ。テントと個人装備だけを成都から持参するが、その他は食料も装備もすべてラサで準備する。

10月18日、北京からきた午後の便でラサに飛ぶ。途中山はよく見えなかったが、ラサは秋晴れ、海抜3650m、気温14℃。半年見ないと開発による変化が窺える。道路の整備が進み、新中国的なコンクリートの画一的な箱物が増え、チベット的な風情は消えつつある。旅行社の幹部との会食はいつもながら贅沢な中華料理である。前回西蔵登山協会の秘書長を招待したときは、豪華な「香港海鮮大酒店」に案内され香港にいるような錯覚をおぼえた。美味な広東料理のフルコースでノルウエー

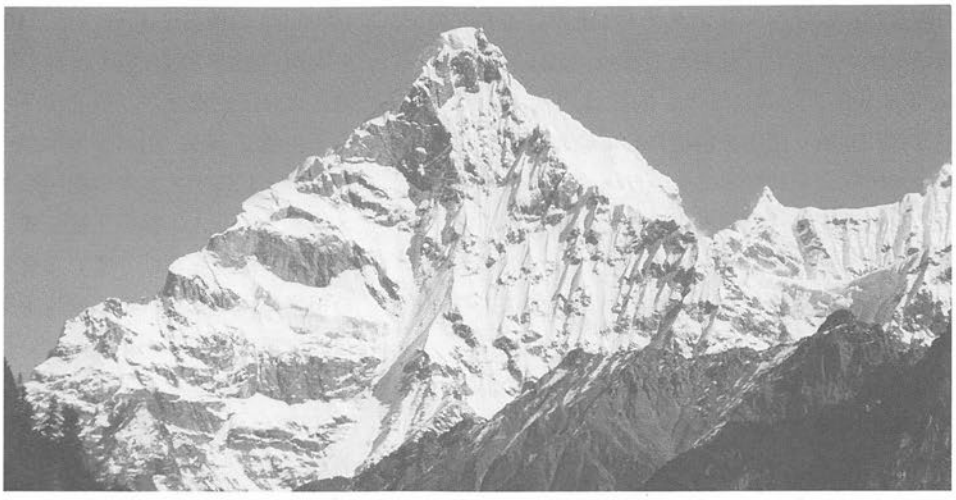
E93°15′
バンダ・ラ
Band La
E98°30′
E
N30°40′
嘉黎
Lhan
4460
阿扎錯
Atsa Tso
N30°30′
ケンラ
Keng La
N30°20′
プンカ
Punka
3760
Jula
朱熱
0 4 8 12 16 20 Km
Altitude : meter
E93°30′
N30°00′

Nyainqentanglha East
South of Yigong Tsangpo
Mountains: Lhari to Basong Lake
念青唐古拉山脈東部
易貢蔵布の南—嘉黎から八松措周辺の山々
Drawn by Tamotsu Nakamura
E93°45′
N30°40′
E94°00′
N30°
Lamayolung
Tsola
Tsongba
Zhongqo
Basong Lake
八松措
Juba

産サーモンの刺身まででる。ラサもそうだが、幹線道路沿いの町は言うにおよばず、僻地の郷政府のある村まで漢族のレストランが進出している。ラサでは中華料理の種類も多様で、東北出身者の餃子店も多い。また、街で働くチベット族の若者のあいだでは食生活の嗜好に変化の兆しがあり、ハンバーガーなど欧米式のファースト・フード店を含む25の洋食レストランがラサ市にできている。カラオケバーが深夜まで賑わっている。地方の奥地でも食べ物屋の殆どを四川省からきた出稼ぎが経営しており、自ずと四川料理がだされる。我々の場合、ガイドの張少宏はチベット料理が嫌いなので、チベッタン・フードを口にする機会がいよいよ少ない。青海省のゴルムドとラサを結ぶ青蔵鉄道の建設がラサ寄りの渓谷沿いの区間から本格的に始まっている。「世界一高所の鉄道」と垂れ幕が張られた工事現場は活気に満ちている。チベット族にたいする懐柔策として、共産主義のイデオロギーを押しつけるより生活の便利さ快適さを提供するほうが効果的である。が、裏では不穏分子にたいしは厳しい締付けか行われているようだが。文明の利器を求めるのは普遍的なことだ。携帯電話の普及は当然とて、太陽光発電（ソーラー・バッテリー）の小型ユニットが街中で売られ、僻地のチベット族の家で使われているのには驚かされた。バイクが急速に増え、馬に取って代わりつつある。

10月20日、晴。8:00　5℃。9:10　パジェロとランド・クルーザーの2台でラサを出発、川蔵公路を東に向かう。チベット族ガイドの若い玉拉君(19)が加わる。晴れと曇りが目まぐるしく変わる天気。ラサよりの川蔵公路沿いの町には広東、福建、折江省の援助による建物がたくさん目に止まる。なかでも広東省が多い。小学校、病院、住宅、発電所など多岐にわたる社会基盤整備をしている。中央政府の対チベット政策の現われであろう。シガツェには山東省の援助で立派なホテルができたと聞く。正午に海抜5020mの米拉山峠を越えると道は下り一方になり渓谷沿いに走る。舗装道路を快調に飛ばし、と言いたいところだが、中国辺境の旅は必ずと言っていいほど何かが起る。その時慌てない、心配しないと常々自分に言い聞かせていても、いざ事に直面すると穏やかではいられない。2台の車のうちランド・クルーザーの調子が悪く、遅れてしまう。30分ごとに待たされる。文句が出かかるのを我慢する。工布江達（ゴンポギャムダ）の町を通過、八松措への分岐点、巴河鎮（パホーチン）（3280m）を16:00に通過、なんとか17:30に林芝地区の州都、八一鎮（3060m）に着く。二つ星の林芝賓館に泊まる。明日は日曜日で公安局は休みなので、係員にホテルに来てもらい、非開放区への入域の登録をする。八一鎮はチベット最大の産業地区で、街はきれいに整備され都会的である。半年まえに比べるとバスの交通量は増えており、ラサ・八一鎮間にはミニ・バスも走っている。が、人民解放軍の基地があるため、公安による外国人の監視は厳しい。八一は中国人民解放軍の建軍の日、8月1日を表わす。林芝はリンゴの産地。小粒だが酸味と甘味がほどよく調和していて素朴で美味い。昔の日本のリンゴを思い出す。茸の種類も多い。松茸も採れる。

10月21日、快晴。7:45　2℃。9:10　出発。石碉（ジーダオ）の村を訪れ、分岐点の巴湖鎮から八松措への道にはいる。観光開発のために道路の拡張工事が進行し、随所の工事現場で発破作業のため車は通行止めになるが、なんとかすり抜けて悪路を先に進むことができた。幸運であった。と言うのは、翌日には川沿いの崖っ淵のところで大掛かりな発破がかけられ一週間交通ストップになるからである。今は石碉だけが残る場所、キングドン・ウォードのショウガ・ゾン（城砦）の廃墟を過ぎると谷は二股となり、右は八松措、左は朱熱、嘉黎に通じる。分岐点の村、雪卡（ショカ）から幾つかの村落を過ぎて、15:45　八松措のリゾート「巴松湖旅遊休暇村」(3500m）に着く。トヨタ・ランドクルーザーはここからラサに引き返す。トルコ石色の碧海を紅葉の始まった樹林がとり囲み、雪峰が落日に染まり、その影を湖面に映す。静謐の時間が流れる。湖岸近くの小さな島に名刹、ニンマ派の僧院、措宗根巴（ツォゾンゴンパ）がある。1345年に創建された。文革のときには破壊されている。16年前と6年前に二度修復されている。政府はこの森・湖・氷河の山々の美しいアルプス的な景勝地の観光開発に早くから着目し1994年にはリゾート施設をつくった。湖岸一周の巡礼路のトレッキングなど観光コースのメニュー



▶ルンボガンゼガボ（六六二〇米）（八松錯の北東）

もできてはいる。しかし、数棟ある別荘風の洒落たコテージはメンテナンスが悪く、劣化がひどい。通常のハイシーズンは5、6、7月だが、今年は道路修理のため客は殆ど来ない。

■ナムラ・カルポは何処

「八松措は険しい山間の細長く狭い氷蝕谷にある。源頭部に雪峰が聳え、その中でも最も際立って人目を引くのがナムラ・カルポというピークである。この湖の長さは約20マイル、
幅は2マイルあり……（湖の源頭部には）二つの大きな流れがある。一つはナムラ・カルポから、もう一つはずっと北の方から流れ出した川が湖に注いでいるが、どちらの川の源流部にも峠はない。たぶん、渓谷の上部は氷河で塞がれているのであろう。」（Francis Kingdon-Ward, The Riddle of The Tsangpo Gorges, Edward Arnold, London, 1926）漂泊のプラント・ハンター（植物採集家）、キングドン・ウォードは1924年にインドのアッサム・ヒマラヤを越えて東南チベットへ入り、ツァンポー大峡谷を探った後、八松措から嘉黎へ足を延ばしている。八松措へは東側の東久（トンジュー）からアクセスした。この時の紀行が上記の本で、数多い著作の中で『青いケシの国』とともに代表作である。幸い2000年5月に金子民雄氏の翻訳『ツァンポー峡谷の謎』（岩波文庫）が出版された。東南チベットを目指す人にとっては1933年の紀行、Plant Hunter in Tibetとともに必読の探検記である。

念青唐古拉山脈東部で探検記に名前が出てくる山は「ナムラ・カルポ」だけである。先ずこの山を見ることが最初にすべきことと考えていた。結果は、特定できず、未だに私にとっては幻の山である。ナムラ・カルポの山名が出ている地図は次ぎの二つだけである。

（1）旧ソ連製1:200,000地形図 ——— 山の標高：6664m

（2）フランスTibet Map Institute 1:310,000図 ——— 山の標高：6680m

山の位置については、フランスの地図は上記のキングドン・ウォードの観察と一致するが、ソ連の地図では一つ東側の谷の源頭にある。この谷の流れは八松措の中央部の南岸、錯高郷結巴村の近くで湖に注いでいる。フランスのナムラ・カルポに相当するソ連地図上の山の標高は6620mである。いずれが正しいのだろうか。キングドン・ウォードは土地の人間から聞いて記録したはずである。が、問題は、今では村人にナムラ・カルポの名前を聞いても誰も反応しないことである。知らないと言う。勿論、我々は八松措からよく見える山の名称を苦労して聞き出したが、その中にナムラ・カルポはない。キングドン・ウォードが言うナムラ・カルポの方向には二つの顕著なピークがあり、村人は手前のピーク（6316m、八松措の西の端からもよく見える鋭峰）をジェシナラカブ、奥のピーク（6620m）をルンゼガンゼガボと呼んでいる。ソ連の地図のナムラ・カルポは八松措湖畔からは見えない。

1999年の秋、ニュージーランド（NZ）山岳会

の現会長、ジョン・ナンカヴィス氏率いる6人の隊が東南チベットに赴いた。New Zealand Alpine Journal 2000によると、同隊は当初ギャラ・ペリ（7294m）山塊を目標にしていたが、許可の都合で出発直前になってナムラ・カルポに変更した。10月上旬に八松措湖岸の結巴に着いた。湖の北端の錯高村から、キングドン・ウォードがナムラ・カルポを望見した北東への谷の源頭に入り一ヶ月登攀活動を行った。

彼らもいずれがナムラ・カルポか迷った。旧ソ連製の地図ではナムラ・カルポは東の谷の源頭にあるが、アメリカ国防省の地図では北の谷にあると判断した。このアメリカの地図はUS Defense Mapping Agency Topo Center で出しているJoint Operation Graphic Series 1501 1:250,000である。一般には手に入らない。市販されている1:500,000のTPCより等高線が細かく、氷雪と氷河が丁寧に描かれているが、、山の標高は実際より高めに表示されている。この地図にはナムラ・カルポの名前は出ていないが、NZ隊は錯高村から北東に向かう谷の北側にあるアメリカの地図の6398mピークをナムラ・カルポと判断した。八松措の西端から見える顕著な氷雪の美しい鋭峰である。さらに西に離れても遠望できる。彼らは土地の人がナムラ・カルポと呼んでいると書いているが、我々が何度訊ねてもゲシナラガブあるいはジェシナラガブ、別名ランラカブ（「王様の玉座」の意味）と答えが返ってきた。ソ連の地図の標高は5742mで、アメリカの地図との差が大きい。ソ連の地図の標高も、中国人民解放軍の地図と比べると総じて高めであるが、このピークに関しては例外的に相当低く表示されていると思う。中国の写真・地図集『雪域神山』（中国登山協会・中国西蔵登山協会編、1995）では、このピークの標高は6316m、山名は結欽那拉嘎布（Jieqinnalagabu）とあるので、我々の耳に聞こえたジェシナラガブは正しいと判断してよいだろう。解放軍の1:50,000や1:100,000の地図を見れば疑問はたちどころに氷解するが、手に入らない以上仕方がない。私のリポートでは青蔵高原山峰図（国家測絵局測絵学研究所・中国登山協会編制）および『雪域神山』で同定できるピーク以外はすべて旧ソ連製地形図1:200,000の標高を表示した。1991年の長野隊の一人が八松措を取り巻く山塊の地図を作っている。地名はほぼ正確だが、残念ながら山の地形まったく不正確である。山名と地形が一致しない。余談だが、上記のアメリカの地図を手に入れるためアメリカ人の友人に頼み手配していたところ、偶然にもその地図を管理しているワシントン国防総省の担当部局が9月11日の同時多発テロ事件で炎上、復旧までに半年以上かかるというこで、未だに入手できていない。

NZ隊は八松措北端と錯高村から北東に向かう谷の湖の北側にベース・キャンプを設営した。登攀活動の前半は源頭の北の氷河を探査し、西側の6384m（アメリカの地図）のピークをアタックした。1,000mの氷雪のクロアールを登り頂稜にでたが、6300m地点から引き返した。後半で彼らのナムラ・カルポにチャレンジしたが、敢え無く敗退している。見るからに岩と氷雪の困難そうな山である。

10月22日、快晴。8：00　－2℃。我々は午前中に湖岸の道路を結巴に移動し、八松措まで歩いて写真を撮りに行く。湖面の奥に左からアミツォミジモ（5904m）、ルンボガンゼガボ（6620m）、ジェシュナラカブ（6316m）の揃い踏みの姿が影を映す。結巴がキャラバンの基地となる。馬の手配その他準備を始める。

10月23日、晴後曇。8：30　5℃。一日余裕ができたので、張少宏は裏の山に登り八松措を俯瞰する写真を撮りに行き、日本人三人は湖岸から尾根を一つ隔てた東の谷の源頭にあるソ連地図のナムラ・カルポ（6664m）の偵察に出かける。車道を一時間ほど歩き二股の手前で、谷の正面に純白の氷雪の襞を薙ぎ落としている無名の秀峰（6610m）が一瞬雲間に姿を現わす。ルンボガンゼガボ（6620m）から東に連なるピークである。ソ連地図のナムラ・カルポはさらに東に位置するが、手前の尾根が視界を遮っていて見えない。断念して引き返す。遠くから目立つ存在ならNZ隊の山、フランスの地図ならルンボガンゼガボ、ウオードの記述はNZ隊の山を示唆している。そしてソ連地図のナムラ・カルポと、結局いずれが正しいナムラ・カルポか特定できなかった。　（続く）

パキスタン2002年登山事情

既に、報道により、周知の事であるが、アメリカによるアフガニスタン空爆という残念な結果と併せて、最近は、印・パ関係にも暗い影が広がりつつある。そんな中の、ヒンズークシュ、カラコルム、カシミールの民の行方が、もっとも私たちにとって気にかかる状況であるのだが…。

昨年秋には、外務省通達による危険度が、5まで跳ね上がったパキスタンであるが、現在は、ペシャワール／クエッタの危険度4を残し、全て、危険度2まで下がっている。(もっとも、この危険度というものも、何処で、どのようにして生まれるのかを知ってしまうと、文句の一つも言わないでいられない。)

しかし、昨秋の状況の中、この危険度の「危険」というものが、実際に感じられたのは、ペシャワールの一部、クエッタの国境付近等の、極々限られた地域のみであった。更に、山間部においては、通常と何ら全く変わり無く、イスラマバード在住の外国人は「何かあった場合は、フンザや、スカルドへ逃げよう。」などと言い合っていたくらいである。

とにかく報道陣の間で、すっかり「危険」の標的にされてしまった感のあるパキスタンであるが、例年と何の変化も無い事を、伝えたい。

今年は、「国際山岳年」という事であるが、秋からの騒動に紛れて、ついにパキスタン政府の山岳年にまつわる、登山者へのメリットは、何の方針も打ち出せずに新しい年を迎えてしまった。その結果が、資料に添付した、今年の登山隊数(昨年12月31日までに申請された分)である。ここまで、パキスタンの危険感が、世界中に広がっていると思わなかったのは、パキスタン政府だけであろう。

その後、日本隊が2隊決定したように聞いているが、それでも、8隊とは、余りにもお粗末としか言えず、パキスタン政府の怠慢さを見た気がして、大いに残念である。また、観光客／登山者を相手に営業をしている、旅行エージェントにおいてもこの結果が出るまで、何の手だてを打たなかったことも事実である。

なお、今年の山岳年は、ＰＴＤＣ(パキスタン観光開発公社)が、各種のイベントを計画しているが、どれをとっても、登山者には関係の無いイベントで、パキスタン国内でのお祭り騒ぎに終わりそうである。

それでも、3隊(?)と、今年度、世界中で一番多くパキスタンへの登山隊を出す日本であるので、とりあえず今年の登山情報を記す事にする。

≪今年の新情報≫

1．ビザ・ルールの再度改正

昨年、ビザ・ルールの改定をお伝えしたが、昨秋のアメリカVSアフガニスタン戦争の際に、数万人にのぼるジャーナリストが、パキスタンに滞在した事、更に多くのアフガン難民が流入した事等により、対応に苦慮したパキスタン内務省では、2000年10月に改定したビザ・ルールを改定以前のルールに戻した。

日本人に対する内容は【パキスタンに入国する者は、どの場合でもビザが必要である。】という事である。(登山隊は、改定前後通して、なんら変わり無く「登山ビザ」を必要としている。)

また、2000年のビザ・ルール改定によって、日本人の外国人登録も不要になっていた(昨年の登山隊は、登録を行わなかった。)が、今年の登山隊(30日以上パキスタンに滞在する者)は、外国人登録が必要である。従って、入国時に外人登録をした場合、出国時には、外国人登録を抹消し、トラベル・パーミットを取得しなければならない。

〔外国人登録〕

30日以上、パキスタンに滞在する者は、最寄りの警察署(Senior Superintendent of Police＝ラワルピンディー滞在の隊は、カチャリー、イスラマバード滞在の隊は、アユブマーケットの事務所)に、パスポートと、写真2枚を添えて、登録する。

登録用紙には、保証人の記載が必要である。エージェントを使っている隊は、エージェントが、保

証人欄を記入するが、個々で手続きを行っている隊は、ホテルにおいて、保証人欄を記入してもらう。

帰国時は、外国人登録証と、パスポートを警察署に持参し、登録を抹消する。その際に、トラベル・パーミットを発行してもらい、出国地のイミグレーションに提出する。

〔観光ビザ〕

トレッキング・ピークや、トレッキングの場合は、観光ビザで、入国が可能である。現在、パキスタン大使館では、宿泊先の予約確認表（現地のホテルが予約ＯＫのＦＡＸか、日本の旅行社で出しているバウチャー）の提示が無いと、観光ビザの発給は、行っていない。現地ホテル、日本の旅行社、現地旅行社から、予約確認証を入手してから、大使館へ申請に行く事。

なお、このルールは、アメリカのアフガン空爆騒動で、発令された対策なので、この騒動が終結した場合には、このルールも、変わると思われるので、渡航時の状況によって異なるであろう。

≪パキスタン大使館≫

住所：〒106-0046 東京都港区元麻布２-14-19
電話：03-3454-4861～4
休日：毎週水・土・日と、日・パ両国の祝祭日
時間：午前10時から12時、午後13時から17時
（申請は、午前中）

２．登山料／環境保護費の振込先口座番号の変更

今までは、登山料と、環境保護基金の払い込み口座番号が異なっていたが、昨年から、同じ口座番号に統一された。なお、観光省発行の登山規約集「Rules and Regulation」に記されている口座番号は、既に使用されていない番号なので、注意する事。

※新しい口座番号

1391215-Other Receipts Fees, Fines and Forfeiture-Royalty,Pollution and Trekking Fees.

払い込み銀行は、今までと同じ「National Bank of Pakistan」である。

注意：パキスタンでの払い込みは、全て、「FROM 32－A」の用紙で行なわなければならない。払い込み用紙は、銀行周辺の文房具屋か、銀行周辺の路上に出店している司法書士から購入する。

３．別送品受け取り書類の変更

登山隊が、隊荷をパキスタンへ別送した場合、関税に限り無税で通関が出来る事は、以前に説明した通りであるが、昨年から、その手続きの際に、提出する書類が増えた。

今までは、Air Way Bill、パッキング・リスト（登山局長の確認印・サイン済みのもの）、無税通関願い書（登山局長の確認印・サイン済みのもの）、受け取り名義人のパスポートの４点で、通関が可能であったが、昨年から、もう１点必要になった。

必要な書類は、「送り返し誓約書」である。

50ルピーのスタンプ・ペーパーに、使い終わったら送り返す旨を誓約し、２名の保証人を立てて、署名し、上記４点とともに、提出する。

この規則は、無税通関した登山用品を、送り返さずに販売する隊が多い事から苦肉の策であるが、各登山隊に「送り返さねばならない！」という意識が無い限り、同じ事のような気がするが…。

このような苦肉の策に生まれたルールは、１年だけで終わってしまう場合があるので、その都度、空港税関、もしくは、通関業者に確認する。

注意：スタンプ・ペーパーは、カチャリー（裁判所の意）周辺にいる、司法書士や、弁護士が販売している。そこで裏に、販売している司法書士／弁護士の署名・捺印をしてもらって、初めて効力を発揮するものなので、注意する事。

４．ヘリコプター救助

一昨年から新しく「アスカリ航空」へヘリコプター救助を要請することになったが、その手続き書類が変更になった。

前回までは、6000＄のデポジットか、利用旅行会社の保証書を持参したが、昨年から、大使館で保証書を発行してくれるようになった。

大使館領事班へは、隊長がパスポートを持参で出頭し、誓約書に署名して発行してもらう。なお、旅行会社へハンドリングを頼んでいる隊は、旅行会社の代行が可能である。（大使館へは、予約は必要。突然行っても、長時間待たさ

れるので、朝のうちに、電話を入れれば、何時が良いか指定してくれる。)

〔在パキスタン日本国大使館〕

Plot No.53-70, Ramna5/4,Diplomatic Enclave 1, islamabad　TEL:051-2279320

担当官：クワバラさん、シリナシハマさん

≪登山申請≫

1．山の決定

希望の山を、決める。(登山／キャラバンのルートも含めて。)

2．隊長の決定

最初は、隊長の名前だけで、申請可能である。隊員は、出発1ヶ月前までが、最終締め切りとなる。また、隊員の名前は、スムースに変更可能(パキスタン入国1ヶ月前ならば)であるが、隊長の変更には、時間がかかるので、あらかじめ変更にならない確実な者の氏名で申請する事。

3．パキスタン入国日の決定

この期日がリエゾン・オフィサー(連絡官)の、イスラマバード出頭日になる。リエゾン・オフィサーの支払等の点から確実な日程が必要。

4．登山料の払い込み

先に、申請書類を提出し、後日振り込みでもかまわない。

登山隊は、申請書類が提出されてから、内務省での審査(隊員の身元確認調査)が行われる。その後、各隊の身元が確認されれば、許可が下りるので、1ヶ月(通常は、3ヶ月といわれている。しかし、今年は、余りにも登山隊が少ないので、観光省から内務省への口添えがあるので、1ヶ月ということである。)の時間がかかる事を考慮に入れて計画を進める必要がある。

〈その他〉

現在、インド大使館が、閉鎖されている。登山隊が入る夏には、印・パ関係も改善されると思う(希望する。)が、パキスタンから、インドへ抜ける事を考えている者は、日本で予めビザを取得してから、来パする事。パキスタンと、インド間の直通空路、直通バス／列車共に、運休しているが、ワガ国境(ラホール～アムリッツアに抜ける国境)は開いており、外国人のみ通行可能である。(1月末現在)

観光ビザの延長手続きが、簡単になった。今までは、内務省へ行き、そこで最初の手続きを行い、次にパスポート・オフィスへ行き、完了であったが、現在は、パスポート・オフィスのみで、延長手続きができる。

パスポート・オフィスは、G－8(ペシャワール・モールという商店街の近く)なお、登山隊は、今まで通り、内務省の審査後、パスポート・オフィスへ行く事になる。(文責:日・パトラベル 大住恵子)

2002年登山隊リスト

	山　名	標高	国　名	隊　長　名	入国日	人数	備　考
1	K 2	8611	ルーマニア	Bogdan Mihnea Cuibus	5月15日	2	
2	ブロード・ピーク	8051	スペイン	Sebastian Alvaro Lomba	12月6日	7	冬期登山
3	ガッシャーブルムⅡ	8035	オーストリア	Wolfgang Fuchs Kirchplats	5月30日	10	
4	ガッシャーブルムⅣ	7925	スイス	Casella Mario	6月2日	8	
5	スパンティーク	7027	日　本	菅原ナガヒサ	7月19日	4	
6	チャンギ		オーストリア	Edi Koblmuller	6月22日	8	

2002年パキスタン休日リスト

月　日	内　容
2月5日	カシミール・デー
22日～23日	犠牲祭イード
3月23日	パキスタン・デー
23日～24日	アシュラ祭
5月1日	メーデー
25日	イード・ミラードン・ナビ
8月14日	独立記念日
11月9日	イクバール・デー
12月5日～7日	イード
25日	ジンナー誕生日

銀行／役所の休日リスト

1／1　2／17　3／13　3／28～29　3／31
4／13　5／2　5／26　6／22　8／21
8／31　10／4　10／15　10／21～22　11／4
11／20　12／26

ネパール登山料無料と75%off〔期間限定〕

ネパール観光省は、2002年2月8日、「国際山岳年」と「エヴェレスト初登頂50年」を記念してである「2002年3月から3年間」について、下記のとおり、一部の山岳（20峰）については「登山料」を「無料」とし、その他の40峰については「登山料」を75%割引25%とすることを発表した。(尚、表のA、B、Cは既許可峰のカテゴリー。※印は昨年度末新開禁されたピークである。)

登山料が無料の山リスト

山　名	標高		山　群
Bhemdang Ri	6150	A	
Leonpo Gang(Big White P)	6979	A	
Gandharava	6248	A	
Gyalzen Peak	6151	A	
Bhairab Takura(Madiya P)	6799	A	
Nepal Peak	6910	A	
Phurbi Chyachu	6631	A	
Ohnmi Kangri	6829	A	
Kirat Chuli(Tent Peak)	7365	A	
Urkinmang	6151	A	
Khang Sar Kang	7485	B	
Baudha	6672	C	
Cheo Himal	6820	C	
Chobuje	6685	C	
Churen	7371	C	
Dhaulagiri Ⅱ	7751	C	
Dhaulagiri Ⅲ	7715	C	
Dhaulagiri Ⅴ	7618	C	
Dhaulagiri Ⅵ	7268	C	
Ganesh Ⅳ	7052	C	

登山料が25%の山リスト

山　名	標高		山　群
Firnkopf	6697	C	
Firnkopf West	6645	C	
Raksha Urai	6593	C	
Surma-Sarovar.North	6523	C	
Api	7132	C	
Api West	7100	C	
Saipal	7031	C	
Saipal East	6882	C	
Jethi Bahurani	6850	B	
Bobaye	6808	B	
Nampa	6755	C	
Nampa South	6580	C	
Rokapi	6467	※	
Korko	6053	※	
Roma	5407	※	
Dhaulagiri	6632	※	
Khiuri Khala	5806	※	
Nampa Ⅱ	6700	※	
Nampa Ⅲ	6618	※	
Yokopahar(NampaⅦ)	6401	※	
Ganesh Ⅴ	6986	C	
Tripura Hiunchuli	6563	C	
Himalchuli East	7893	C	
Himalchuli West	7540	C	
Himalchuli North	7371	C	
Hongde	6556	C	
Jagdula Peak	5764	C	
Shey Shikhar	6139	C	
Kangbachen	7903	C	
Kanjeroba	6883	C	
Khatang	6782	C	
Lamjung Himal	6983	C	
Lobuje West	6145	C	
Manapathi	6380	C	
Ngojumbakang	7743	C	
Shartse	7459	C	
Sisne	5849	C	
Tso Karpo	6518	C	
Lamgpo Peak(Piramid)	6954	C	
Gyajikang	7038	C	

※資料提供：㈱T.H.I／大西保

地域ニュース

《中国》

ＣＭＡ主席に王宝良氏就任

１月中旬に行われた中国登山協会（ＣＭＡ）の選挙で国家体育総局副局長の王宝良氏が主席に選出され就任した。また、李致新氏が執行副主席となり実情家３人を含む16人が副主席として選出された。ＣＭＡと各地方登山協会は全ての山について法律に基づいて管理することで合意した。

Books

ヒマラヤ・チベット縦横無尽

ＮＨＫカメラマンの東野良氏が、ヒマラヤとチベットの秘境を舞台に撮影に駆けた記録。

未踏峰ナムチャ・バルワの夕雲／聖山巡礼、カイラスへ／消えた菩薩のほほ笑み／白き天女の峰シェルパのささやき／涙に映ったエヴェレスト／銀亀たちの夢を追って／スノー・レイク／峠の先に何がある、山の向こうに何がある

1984年夏の２ヶ月を評者は著者とチベット行（チャンタン高原、カイラス周遊）を共にしたが、その時の感動が18年過ぎた今も鮮明に想い出すことができる。（記：山森）

Ａ５判　293頁　2001年１月21日刊
平凡社　1700円＋税

バルトロの輝く壁

2001年に栃木県南地区山岳協議会が、カラコルムのガッシャーブルムⅡ（8,035ｍ）に派遣した登山隊の報告書。登山は７名の登頂者を出して成功したが、ルート上にある４ｍ/ｍのシュリンゲの存在、蜘蛛の糸状態の大ユマーリング大会、有酸素登山の酸素切れ、登頂出来なかったメンバーの心情吐露など参考になる記述が多い。（記：山森）

Ａ４判　153頁(内カラー16頁) 2002年１月18日刊
〒328-0054　栃木市平井町364
栃木県南地区山岳協議会

トピックス

第９回　高所登山　事故と環境対策研修会

ＨＡＪ主催恒例の「事故対」が下記のとおり開催される。

記

日時：2002年４月７日（日）９時～16時50分
場所：豊島区民センター　☎ 03-3984-7601
　　豊島区東池袋１－20－10
会費：3000円（資料代、昼食は各自で）
内容：雪崩からいかに逃れるか（中川裕）、テイクイン、テイクアウト（野沢井歩）、人間の体の仕組みと高所障害（斎藤繁）、高峰に潜む様々な危険と遭難事故例（山森欣一）
申込み：ＨＡＪ事務局　☎ 03-3988-8474
定員：50名

第10回　北海道海外登山研究会のご案内

恒例の北海道海登研が下記のとおり開催される。

記

日時：2002年４月20日（土）13時～21（日）正午
場所：滝野すずらん公園　青少年の家
　　札幌市南区滝野247　☎ 011-591-0303
会費：一般8,000円、学生4,000円（宿泊費、食費、資料代込み、日帰りの場合4,000円）
内容：スポーツドクター「塩田純一氏」講演他、
連絡先：北海道海外登山研究会実行委員会
　　代表：大内倫文　☎ 011-222-5053(つる)
■財政支援金：１万円（森田千里）

東京集会のお知らせ

日　時　３月25日（月）午後７時～
内　容　最近のパキスタン情勢
場　所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

ティンカール・パスの旅

野沢井　歩

今回アピ登山が無事終了し、時間が許せば是非ティンカール・パスまで足を伸ばしたいと考えていた。しかし、お目付け役のリエゾン・オフィサー、まさかのＢＣ到着でこの計画も難しくなってしまった。私がこの計画をほのめかすと、少々難色を示していたのだ。だが彼は予想通りに？すぐにＢＣを離れカトマンズに戻る事になり、更に「チャングルのチェック・ポストで追い返されなければＯＫだろう」、という了解も取り付ける事も出来た。10月11日、念願のティンカール・パスへ出発する。帰路キャラバンは15日にスタートで、ローカル・ポーターもそれに合わせＢＣ到着の予定である。そして今回、その間を利用しての２泊３日のトレッキングだ。コックのアントレも同行する。

しかし、前日夜、予想外の降雪でメステントが潰されるという事件があり半ばこの旅は諦めムードだったが、朝から天候も回復した事も有り予定通りＢＣを後にした。

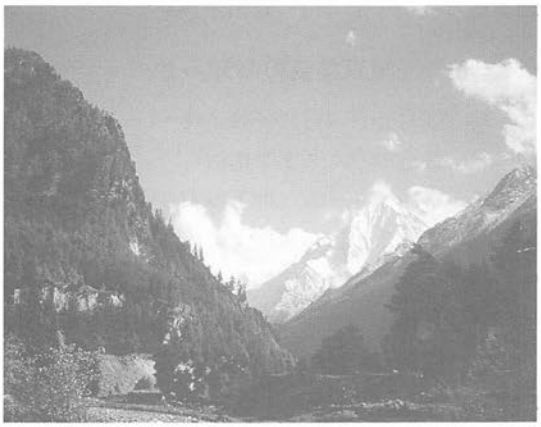
昨日の降雪は4000ｍラインが雪線だったらしく、２段目の谷に下ると既に雪は無い。アピ・コーラからキャラバンで辿った街道に出る。山羊の放牧致を抜けしばらくするとビャンス地方に入り、マハカリ川を挟み対岸にはインド、ガービヤンの村が望める。同志社大学隊はこのガービヤンを起点にアピを目指したのだ。当時のキャラバンの大変さを感じる。

ここヒャンス地方の人々は農耕や牧畜も行なうがやはりチベットとの交易を主に行なってきたので以外と裕福だ。最初の村チャングルにはこの交易者の為の立派な宿もある。又、ヒンドゥー文化圏からチベット文化圏に替わってきたのがチャン（ドブロク）が飲める事からもうかがえる。

ここでマハカリ川を離れ、支流となるティンカール・コーラ沿いの道も辿る事になる。マハカリ川源流部カラパニ付近は現在インド、ネパール間で国境問題に揺れている部分でもある。

チャングルにはチェックポストがありここで追い返されるかと心配されたが、トレッキング・パーミッション、ＥＸＰパーミッションのチェックも無く、ノートに必要事項を記載すると暖かく送り出され、気が抜けた。

チャングルから４時間程ティンカール・コーラ沿いの道を登ると最奥の村ティンカールに到着。チベッタン的な平らな屋根にタルチョが建てられ、



▲チャングルから見るナンパ・コーラ

▲最奥の村　ティンカール

麦、ソバの段々畑が続いている。

しかしその後、文献で調べてみると、この「タルチョ」(一本の木の先端部のみ枝を残し、その下の枝を全て落として棒状にして旗を付け立てられている)はここビアンス地方では「ダルチョ」と呼ばれ、チベット文化圏に見られるタルチョと類似の物だが、ダルチョーとタルチョは同じ物では無いらしい。ダルチョーに付いている白い布は、無地の白色で、チベット仏教の経文は全く印刷されていない。そういった事からここビヤンス地方の人々はチベット仏教徒ではないらしい。

ヒマラヤ南麓のヒンドゥー文化と北のチベット文化の融合によって生まれた独自の文化を形成しているのだ。

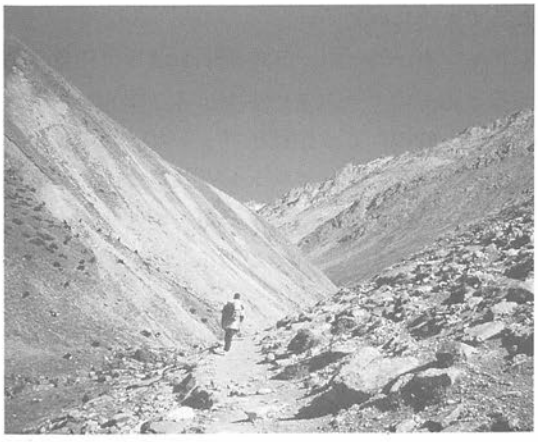
ティンカール村では、ある一件のバッティー(ただの民家か?)にお世話になる。薪に火を起こし素朴なダルバートにありつくのに2時間以上の時間が掛かった。しかしそれを持つ間に村人とのの交流を深め、飲んだチャンは絶品だった。あまりに美味いのでペットボトル数本に帰り用のチャンを頼んでおく事も忘れなかった。

10月13日、朝食はこの地域の伝統的な「シレコト」と呼ばれるソバのチャパティーというかパンに近い物を食べた。これはこの地域伝統の食べ物で、塩、唐辛子のタレを付けて食べるのだが素朴な味が何とも美味しい。

今村夫妻はチャングルに戻り、残りのメンバーでティンカール・パスを目指す。2時間程で森林限界を超え、草地の中の道となる。最後の警察によるチェックポストがあるが、マオイストの襲撃

▲交易、巡礼者相手のテント・バッティー

▼ティンカール・コーラ源頭近く



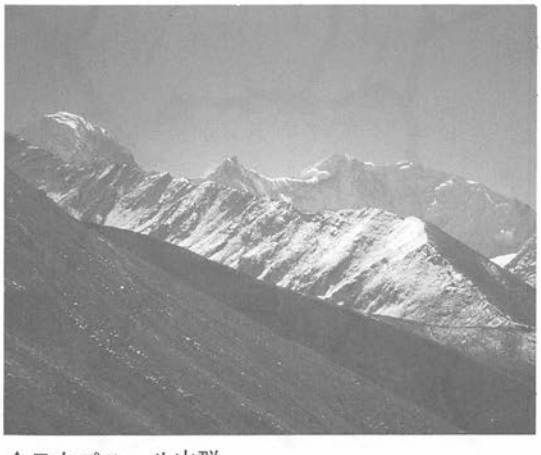
を警戒して無人となっていた。

更に登ると、ティンカール・コーラも次第に源頭の渓相となってきた。ヒマラヤン・ブルーの抜ける様な青空に、白く輝くヒマラヤの展望も素晴らしい。

どうも道のいたる所に牛、水牛の死骸が多い。聞く所によるとネパールからチベットに売られに行く途中に死んでいったらしい。それを餌に狙うのか、かなりの数の猛禽類が羽を休め、荒涼とした大地を感じさせられる風景だ。

途中には数カ所のテント・バッティーが交易者相手に冬前の最後の商売を行なっている。ここではお茶、食事はもとより宿泊所も兼ね交易者、巡礼者の憩いの場となっている。

やがて後方には、ナンパ、N1〜N8、ヨカパハールまで連なる山群、そしてひときわ大きなアピ。その双耳峰、頂上プラトーも望める。今回キャンセルとなってしまった松舘氏はナンパが見たい



▲ヨカパハール山群

と言っていた、是非この景色を見せてあげたかったとカメラに収める。

ティンカール・コーラの源頭を過ぎ更に登り詰めると強風のティンカール・パス（5258m）に到着した。峠の向こう側はチベットだ。

先に到着した私はアントレと共に更にチベット側の見晴らしの良い場所まで足を延ばしてみる。

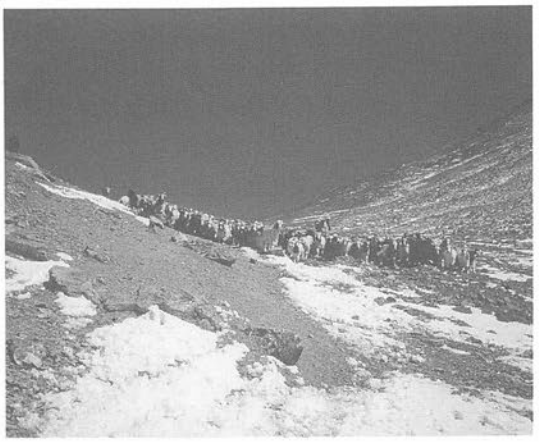
密入国？だが、これでこの年二回目のチベット入国となった。

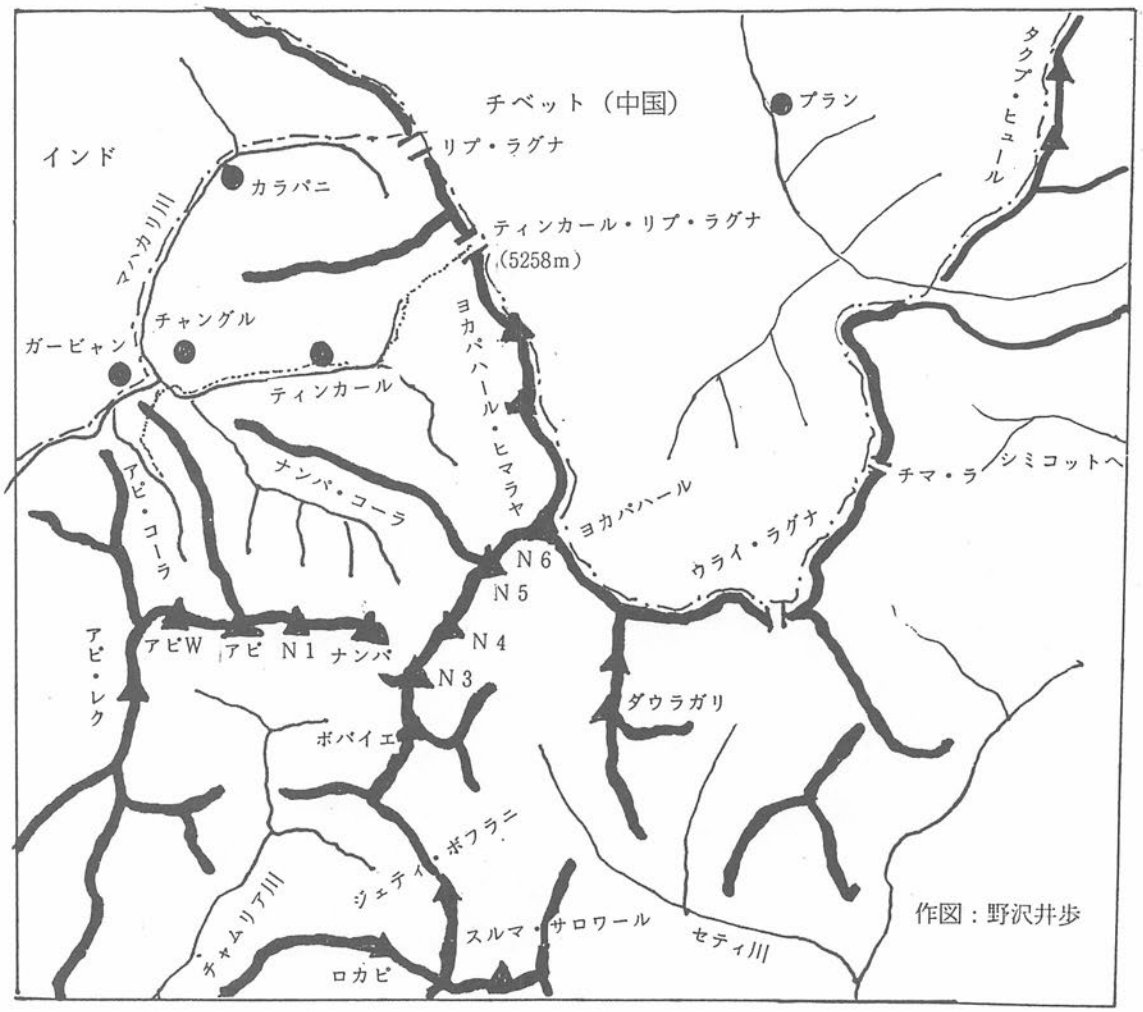
荒涼とした赤茶けた大地に一際大きなナムナニが聳えている。西に見えるのはナラカンカール山群だろう。カイラスは見ることが出来ず、アントレは少し残念そうだった。

ここから麓の街プランまでは半日らしいが、その街を見出す事は出来なかった。ちょうど2年前にあの街に滞在した事を思い出し、この旅が一つに繋がった様で感慨深い。峠にはプランからのキャラバン隊が後を絶たない。沢山の山羊の群れは数日後のダサイン用に売られて行くのだろう。

私、岩崎、古谷、アントレ（大阪ナラカンカール隊のコック）とプランに想いがある4名が結果的にここまでたどり着いた様だ。

▼ティンカール・パスを越えて来る山羊





▼パスからチベット　後方はナムナニ

途中リタイアした荻原を拾い、今村夫妻の待つチャングルへ急ぐ。途中のテント・バッティーで素朴なダルバードで昼飯。プランからキャラバン中の行商人は中国製ブランディーを飲んでいる。我々もロキシーを頂き、ほろ酔い気分で下る。

夕方ティンカールに到着。預けていた荷物を回収し、更に頼んでおいた美味しいチャンを仕入れて更に下る。しかし途中で日がとっぷりと暮れ、ヘッドランプの明かりを便りに、離れない様にまとまって歩く。結局、チャングル手前の小さなバッティーにお世話になる事にする。

ここは交易者相手の昔ながらの素朴な味わい深いバッティーで、エヴェレスト街道、アンナプルナ・エリアではもう味わう事が出来ない。カマドにくべられた焚き火を眺めながらチャンを飲む。

夕食のダルバートのタルカリは隣の畑から取り立てのサグ（青菜）。そして甘みのある生のムラ（ダイコン）を頂く。

こういった昔ながらのバッティーは、食事を採った客は宿泊出来るシステムだ。２階部屋に毛皮を敷いてもらい就寝。

朝はソバで作った「シレコト」とチベッタン茶で朝飯。

早朝にはチャングルへ到着したが、今村夫妻はちょうど５分前にＢＣへ向けて出発してしまったらしい。

チャングルの「カイラス・ホテル」でお茶を飲み一服していると、ここの主人が「アピの氷河湖には魚がいるだろう？」と聞いてくる。「いるはずが無い。」と我々は断言するのだが、ここの主人は一向に引かず「ちょっと見てくれ」と部屋に通された。さすがここチャングルで裕福な暮らしを送っているらしく、夫婦の部屋には中国製品であふれている。

さてチベッタン・ティーをご馳走になり、その湖で獲れたという魚を見せられた。それは新聞紙に大切に包まれ、仰々しく取り出された物体はなんと「スルメ」だった。奇しくも昨夜ちょうどみんなでチャンを飲みながらこのスルメを食べていたので「なンーだスルメジャン！」「アントレ、昨日これ喰ったなー」「焼いて喰うとミート・ツァ！」と言ってしまった。主人は何故か寂しそうな顔をした。

チャングルを出発すると、アントレが「あの主人、あのスルメ、アピの湖で獲れた聖なる魚で薬になる、と10万ルピー（約20万円）で買ったらしい」と報告してきた。ネパールの物価というか、スルメの価値を知っている我々としてはおかしいやら気の毒やら…。やはりどこの国にもこういった詐欺があるのだなー、気を付けよう。さて海から遠く離れたこんな場所でやはり「スルメ」みたいな異様な物体はそれなりに信憑性があるのだろうが、さて誰が、それともどこかの登山隊がこれを持ち込んだのだろうか？。

スルメ話も終わり、ＢＣに向けて急ぐ。アピ・コーラの手前、途中の林の中では山羊の放牧がてらにテント・バッティーが営業されている。そこのオバサンを相手にちょっと一杯のお茶のつもりがロキシーから始まり更に中国ブランディーまで数本空きすっかりベロベロ状態。酔った勢いで中国ブランディー、ニワトリまで買い込み千鳥足で帰る事になってしまった。私はアピ・コーラ沿いの道のガレ場で数回滑落ながらもなんとか無事にＢＣに到着した。ＢＣで待つ今村夫妻、スタッフには帰りの遅い我々の為に随分心配を掛けてしまった。特に途中、酔っ払って寝込んでしまった岩崎氏の情報は、翌日地元住民にも知れ渡っていた。

買ってきたニワトリを肴に中国ブランディーで懲りずに宴会を続ける私たちであった。ティンカール・パスに想いを馳せて。

（チーム・アピ 2001）

カンチェンジュンガ入山者〔1967－2000＝34年間〕

（注）派遣母体後ろの（　）内は登山隊員＋報道隊員等であるが、学術隊員、医師などは登山隊員とした。氏名の×印は、その登山で死亡したもの。

［１］1967年春、偵察〔ネパール側〕

京都大学（２）

隊長：樋口明生(37)／隊員：松田隆雄(25)

［ヤルン・カン（8,505ｍ）の偵察に入り、５月26日西尾根の6,040ｍに到達した。］

［２］1973年春［ネパール側］

京都大学（15）

隊長：西堀栄三郎(70)／隊員：樋口明生(43)、斎藤惇生(43)、田附重夫(38)、富田幸次郎(33)、吉野熙道(32)、×松田隆雄(31)、神山義明(30)、上田豊(29)、浅野潔(28)、井上治郎(27)、甲斐邦男(25)

［ヤルン・カンに挑戦。西尾根から前衛峰のコルに出て５月14日松田、上田が頂上主稜線に到達。ガスと吹雪で頂上と判断したが、その後ＨＡＪ隊が快晴の中、登頂しＡＡＣＫとＨＡＪの頂上は異なることが判明した。帰路15日、松田隊員が転落死亡。］

［３］1974年春［ネパール側］

日本大学（13）

隊長：石坂昭二郎(45)／隊員：三好勝彦(30)、古畑勇(28)、加藤捷治(28)、中村進(28)、樋山規夫(26)、平野隆司(26)、中山昌之(27)、半谷伸俊(26)、西川正雄(27)、福島佑二(26)、宗方慎二(23)、柴田健(35)

［ヤルン・カンに挑戦。西尾根から前衛峰のコルに出て５月14日に平野とパサンが8,400ｍの前衛峰に登頂したがヤルン・カン登頂は断念］

［４］1980年春［ネパール側］

山学同志会（７＋３＝10）

隊長：小西政継(41)／隊員／深田良一(37)、川村晴一(32)、坂下直枝(33)、大宮求(31)、鈴木昇巳(27)、坂野俊孝(35)／報道：相沢裕文(47)、磯川道夫、阿久津悦夫(41)

［カンチェンジュンガ主峰北壁に挑戦。５月14日、深田、川村、坂下、鈴木が北壁から無酸素で初登攀に成功。17日にも大宮、坂野が２名のＨＡＰと登頂した。］

［５］1980年春・偵察［ネパール側］

日本ヒマラヤ協会（７）

隊長：山森欣一(36)／隊員：菊地薫(34)、山田昇(30)、若尾巻廣(30)、八嶋寛(30)、角田不二(27)、片岡邦夫(25)

［翌年実施するカンチェンジュンガ主峰と南峰の縦走登山の偵察を行う。グレート・シェルフから南峰7,650ｍまで偵察］

［６］1981年春［ネパール側］

日本ヒマラヤ協会（22）

隊長：山森欣一(37)／隊員：菊地薫(35)、八木原圀明(34)、保坂昭憲(33)、尾形好雄(32)、飛田和夫(35)、山田昇(31)、藤倉和美(31)、若尾巻廣(31)、渡辺優(31)、八嶋寛(31)、佐久間隆(30)、小松伸(30)、角田不二(28)、福山茂(30)、片岡邦夫(27)、谷岡俊匡(27)、二階義治(27)、鈴木茂(26)、鈴木治三郎(25)、加藤康二(31)、加藤亮子(46)

［カンチェンジュンガ主峰とヤルン・カンの縦走に挑戦。５月９日主峰にノーマルルートから保坂、山田、藤倉、片岡、鈴木茂、ＨＡＰニマが登頂。同日ヤルン・カンのドイツルートから八木原、尾形、飛田、八嶋、角田が登頂したものの、時間切れのため縦走は断念］

［７］1984年春［ネパール側］

日本山岳会（27＋10＝37）

隊長:鹿野勝彦(41)／隊員：重廣恒夫(36)、平野隆司(36)、松沢哲郎(33)、三辺夏雄(40)、梶正彦(36)、小原俊(37)、寺本正史(35)、小林政志(34)、和田城志(34)、尾崎隆(30)、磯野剛太(29)、佐々木慶正(28)、片岡泰彦(28)、藤原一孝(28)、三谷統一郎(27)、小林春好(25)、北村貢(25)、大谷亮(24)、山本宗彦(24)、大谷直弘(23)、広川健太郎(23)、賀集信(35)、只野直孝

(38)、丸尾裕治、村田康明、飯田肇（29）／報道：岩下莞爾(48)、迫田泰敏(38)、中村進(38)、三ツ橋徹炯(36)、田代啓史(34)、佐藤幸一郎(32)、木崎徹、村口徳行(27)、智弁健二(26)、古野淳(23)

［カンチェンジュンガ主峰、中央峰、南峰の縦走に挑戦。５月18日南峰に重廣、和田、三谷とＨＡＰニマが登頂。ニマは下山。３名は中央峰まで縦走に成功。グレート・シェルフに降りて、20日和田、三谷は主峰に登頂した。19日には主峰に尾崎とＨＡＰ１名が登頂。17日中央峰に磯野、大谷亮とＨＡＰ１名が登頂した。只野は５月12日グレート・シェルフの7,800ｍからヤルン氷河の5,100ｍまで19分でハング・グライダーで飛行した］

［８］1988年秋［ネパール側］

ヒマラヤ同人（３）

隊長：福島正明(37)／隊員：海野雅之(26)、小村恭子(24)

［カンチェンジュンガ主峰に挑戦。10月17日海野とニマ・テンバが登頂に成功した］

［９］1991年春［インド側］

日本ヒマラヤ協会（14）

隊長:尾形好雄(42)／隊員：名塚秀二(36)、吉田秀樹(38)、今村裕隆(32)、田辺治(30)、江塚進介(30)、佐藤光由(30)、小田隆三(28)、後藤文明(26)、星野龍史(23)、秋山剛(20)、新郷信廣(48)、北川みはる(42)、貝塚珠樹(30)

［インド、ＩＴＢＰと合同でシッキム側北東支稜から挑戦。５月24日名塚、今村、小田の３名が登頂に成功した。］

［10］1995年秋［ネパール側］

ガイア・アルパインクラブ（４）

隊長：小西浩史(33)／隊員：戸高雅史(33)、棚橋靖(32)、北村俊之(33)

［カンチェンジュンガ主峰に無酸素で挑戦。10月下旬8,400ｍまで到達した。］

［11］1998年春［ネパール側］

日本山岳会（10）

隊長：谷川太郎(31)／隊員：×赤坂謙三(30)、田辺治(37)、奥田仁一(32)、山本茂久(29)、長久保浩司(29)、廣瀬健太(28)、×椎名厚史(28)、大橋隆平(25)、中村和貞(25)

［カンチェンジュンガ主峰北壁をＨＡＰ無し、最終キャンプ睡眠時だけ酸素使用で挑戦。５月15日谷川、赤坂、奥田、広瀬、椎名が登頂に成功。しかし下山中に椎名が8,200ｍ付近で衰弱のため死亡し、その下で赤坂も転落死亡した。また、奥田も目が見えなくなり8,100ｍ付近でビバークしたが、救出された。この３名はいずれも高度障害によるものである。］

◎無酸素登頂者

深田良一（1980,5,14　北壁）　川村晴一（1980,5,14）　坂下直枝（1980,5,14　北壁）　鈴木昇巳（1980,5,14　北壁）　大宮求（1980,5,17　北壁）　坂野俊孝（1980,5,17　北壁）

◎縦走（南峰から中央峰まで）

重廣恒夫（1984,5,18）　和田城志（1984,5,18）　三谷統一郎（1984,5,18）

◎初登攀

北壁下部（1980,5,14）　深田良一、川村晴一、坂下直枝、鈴木昇巳

20世紀日本人カンチェンジュンガ登頂者リスト

No.	氏　名	生年月日	ルート	登頂年月日	年齢	備考
001	川村晴一	1947,12,	北壁・無酸素	1980,5,14	32	初登攀・無酸素
002	鈴木昇巳	1953,2,	北壁・無酸素	1980,5,14	27	初登攀・無酸素
003	坂下直枝	1947,2,	北壁・無酸素	1980,5,14	33	初登攀・無酸素
004	深田良一	1942,11,	北壁・無酸素	1980,5,14	37	初登攀・無酸素
005	大宮　求	1949,4,	北壁・無酸素	1980,5,17	31	無酸素
006	×坂野俊孝	1944,7,	北壁・無酸素	1980,5,17	35	無酸素
007	×山田　昇	1950,2,	南西面通常	1981,5,9	31	
008	×藤倉和美	1950,3,	南西面通常	1981,5,9	31	
009	保坂昭憲	1948,2,	南西面通常	1981,5,9	33	
010	鈴木　茂	1955,1,	南西面通常	1981,5,9	26	
011	片岡邦夫	1954,4,	南西面通常	1981,5,9	27	
012	尾崎　隆	1952,9,	南西面通常	1984,5,19	31	
013	三谷統一郎	1958,3,	南西面通常	1984,5,20	26	
014	和田城志	1949,10,	南西面通常	1984,5,20	34	
015	海野雅之	1962,6,	南西面通常	1988,10,17	26	
016	名塚秀二	1954,11,	北東支稜	1991,5,24	36	インド側
017	小田隆三	1962,9,	北東支稜	1991,5,24	28	インド側
018	今村裕隆	1959,4,	北東支稜	1991,5,24	32	インド側
019	谷川太郎	1967,6,	北面～支稜	1998,5,16	30	
020	×赤坂謙三	1968,4,	北面～支稜	1998,5,16	30	
021	奥田仁一	1966,9,	北面～支稜	1998,5,16	31	
022	広瀬健太	1970,1,	北面～支稜	1998,5,16	28	
023	×椎名厚史	1970,6,	北面～支稜	1998,5,16	27	

（注）ヤルン・カン等の登頂者はマカルー編で。

■ 寸 感 ■

2月12日付の新華社は、中国登山協会が08年に開催される「北京五輪」の聖火リレーで、チョモランマ越えを提案すると伝えた。ネパール側からだとすると20年振りの縦断となりそうだ。（山森）

事務局日誌（2月）

2日（土）　ニンチン・カンサ隊合宿　於ルーム、（山森、野沢井）
3日（日）　第10回「中国登山研究会」（於豊島区民センター）（21名）
4日（月）　ＣＭＡからアナカンの件ＦＡＸ有り
6日（火）　ＨＡＪ創立35周年記念「講演会＆祝賀会」について常務理事会メンバーへＦＡＸ
8日（金）　ヒマラヤ364号発送
10日（日）　ＣＭＡからニンチン・カンサ隊荷の別送等についてＦＡＸ有り
16日（土）　労山新春交流会（於、稲城市　山森）
17日（日）　日本ブータン友好協会懇親会（於、中野サンプラザ、酒井、山森）
20日（水）　クルト・ディームベルガー氏歓迎会、（於：高田馬場、酒井、山森、尾形、中川）
21日（木）　クルト・ディームベルガー氏ＪＭＡ歓迎会（於、東池袋、山森、寺沢）
23日～24日　第40回「日山協海外登山技術研究会」於、忍野、山森
25日（月）　東京集会（18名）
28日（木）　クルト・ディームベルガー氏ＪＭＡサヨナラ（於、高田馬場、山森）

ヒマラヤ No.365（4月号）

平成14年3月10日印刷　14年4月1日発行
発行人　山森欣一
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋4－2－7
萬栄ビル501号
電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

東京新聞の山岳書　**東京新聞出版局**　〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL:(03)3740-2674(直)

山小屋の主人の炉端話　著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る「人」話の取って置きのお話。　工藤隆雄 著　1500円

すぐ役立つ 山の花学　【飛騨高山の花博士】として知られる著者の、山の花見術入門書。　小野木三郎 著　1456円

すぐ役立つ 山の気象と救急法　山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。　飯田睦治郎 桜井博幸 著　1359円

すぐ役立つ 記念日の山に登ろう　人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどこに。　石井光造 著　1300円

山の百名水　山岳写真歴30年、北海道 利尻から尾久島まで、山の百名水を取材。　山下喜一郎 著　1553円

北アルプス やまびと物語　「岳人」に3年余り連載した「山人探訪・男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための一冊。　柳原修一 著　1456円

北アルプス 山小屋物語　歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。　柳原修一 著　1456円

花と歴史の50山　「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。　田中澄江 著　1359円

改訂増補 六十歳からの日本三百名山　60歳から13年間で三百座を踏破したスーパーお爺さんの山行記。　田中三郎 著　1456円

新・山靴の音　還暦をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。　芳野満彦 著　1262円

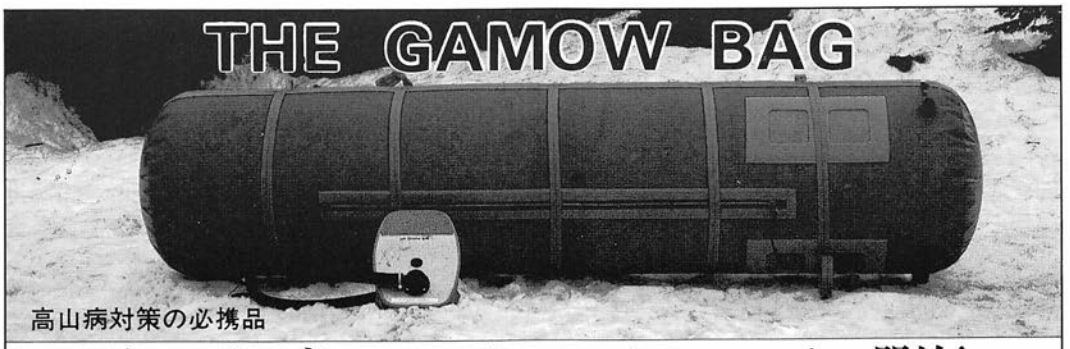
中高年登山 なんでも百科　世界的な女性登山家が、初心者とアルプス、ヒマラヤを歩き、山を楽しみ安全に下りてくるよう伝授する。　福島正明 著　1500円

さわやかに山へ　「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。　田部井淳子 著　1500円

登山の運動生理学百科　今まで数多く発刊された山書、何を読んだらよいか。そん時の指針として「岳人」連載時から好評。　山本正嘉 著　2000円

山書散策　河村正之 著　1500円

※東京新聞の販売店でも取り次ぎいたします。※本体価格に消費税が加算されます。



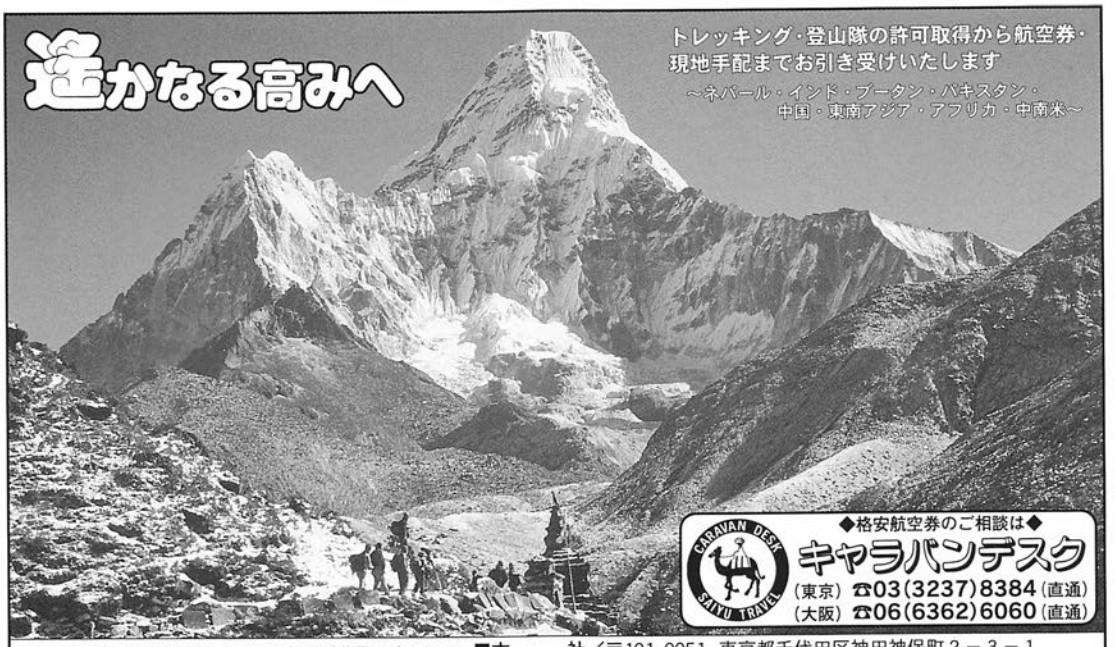
高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約２０００m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型)

総代理店 ： **日本メディコ株式会社**
レンタル・販売問い合わせ先 ： **株式会社 ティ・エッチ・アイ**
〒135 東京都江東区木場２-５-７ ＫＨビル７階
ＴＥＬ：03-5245-0511 ＦＡＸ：03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)



トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア
株式会社 西遊旅行
国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５F
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町６－４ 北川ビル５F
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル(通話料無料)をご利用下さい。
0120－811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿１-16-７ ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町１-６-１（タキイビル２Ｆ）☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町３-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町３-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町１-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町５-３ ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-４ ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-１ ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手３-４-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通２-５-１ ☎025-243-6330
●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南１-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡４-１-８ ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通１-４-５ ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通１-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西４-８ ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西３-５ ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条４-１-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条１-43-９ ☎011-883-4477
●外商部（メールオーダー係）／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3200-7219

ICI石井スポーツ

事　務　所／〒169-0073 東京都新宿区百人町１-４-15 ☎03-3200-1004